

能登半島地震の発災直後からの継続的な支援

ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ

JAPAN COMMUNITY IMPACT 震災支援プロジェクト 社員ボランティアの皆様

【パートナー団体: 社会福祉法人 羽咋市社会福祉協議会 他】

■活動の目的:

2024 年 1 月 1 日に発災した能登半島地震に対して、以下の 3 つの目的に共感する社員を集め、震災支援の志を具現化しました。

- 急性期に奥能登の被災者の命を救うライフラインを早急に送ること
- アクセスの良さと安定した長期支援を実現すべく、激震地から少し離れ、被災しながらも「優先すべきは奥能登」と我慢をしている中能登エリアにおいて実働支援を行うこと
- 被災地に行けない社員に支援の機会を提供すること

■活動を始めたきっかけ(活動開始 2024 年 1 月):

能登半島地震の直後、平時に支援する顔なじみの医療系 NGO が、危険を顧みず続々と能登へ往訪するのを垣間見て、私達も組織は異なるもの、心をひとつに迅速かつ支援ニーズに応えていきたいと欲したことがきっかけです。実働支援においては、まだ県外ボランティアを是としなかった 1 月において、本音ベースで私達に支援に来てほしいと訴えてくださった中能登の羽咋市(はくいし)社会福祉協議会への一本のお電話が震災支援を加速させる大きなきっかけとなりました。



■活動内容(ボランティア実数 約 600 名):

●1/9 急性期: 命を繋ぐ緊急支援

ライフラインが滞る奥能登の珠洲市で活動する団体に飲料水を配給しました。当時、大手運送業者は現地への運送を停止していたため、購買システム上に登録されたあらゆる小規模の運送事業者チームで問い合わせ、心ある運送業者に巡り合い、8 台の赤帽に、2,600ℓの飲料水を載せ、珠洲市の支援団体へ送付しました。

●2/11～7/31の 復旧期 :実働ボランティア

倒壊したブロック塀の軽トラへの積み込み・運搬、飛散した家財道具の片づけ、全壊/半壊などの判定を受け公費解体となる前の家財道具や瓦礫の撤去の運搬、液状化被害を受けた拠点の土嚢づくりなどをほぼ毎週土日祝日に実施しました。

北陸メンバーと連携しながらも、地方勤務者は数が限られているため、東京・大阪・福岡などの大都市圏から社員を誘致。原則、交通費支援や宿泊支援は出ないため、現地の支援宅や無料古民家を紹介いただくなどして、志ある社員(延 185 名)の往訪を実現しました。

●3月23日～6月19日にJ&J*の10拠点(11回)で断続実施 :買うボランティア

3月23日、能登半島地震で焼失した輪島朝市を1日限定で金沢市において復活させる『出張輪島朝市』が開催されました。雨が降りしきる天候不良の中、1万3千人が集まり大盛況となりました。北陸メンバー中心に購買支援を行いました。

ここで購入した商品は、今後、4月中旬にかけて、J&Jの10拠点で開催する『拠点見本市』において販売し、寄付も上乘せします。拠点をまたない営業所の所員向けにもJCI**ポータルサイトを通じて輪島の商品を紹介し、社員が購入して得られたキャッシュは、『災害マッチング寄付』の延数と合算して、奥能登を支援するNPOに寄付しました。

●11月12日現在の活動: オンラインで買うボランティア

9月下旬には発生した奥能登豪雨災害を踏まえ、実働支援を再開するとともに、被災事業者の商品をオンラインで購入する「買うボランティア(買うボラ)」の活動を推進しています。

*ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ

** JAPAN COMMUNITY IMPACT

■活動の成果:

社員の延参加者数は1,100人を超えています。その内訳は、命を繋ぐ緊急支援17名、実働ボランティア数185名、輪島朝市の買うボランティア参加数690名、災害マッチング寄付170人となっています。

また、実働ボランティアが400世帯を超える居宅を支援し、従業員の寄付は約400万円となり、会社の寄付は2000万円を超えました。

TBSの特集 ～報道されない被災地… 実は“全壊の家屋”も「我慢しなくちゃいけない」住民らを支える民間ボランティアの思い～で、約3分間、当社の活動が紹介され、瞬く間に県内外から中能登への支援が拡大しました。



第10回企業ボランティアアワード『特別賞』